

霜

霜ハ、シモト云フ、水氣ノ凝結シテ小片ト爲リタル者ニシテ、冬季ニアラズシテ降ルヲ變異

トセリ、

名稱

〔倭名類聚抄風雪〕霜 陸詞切韻云、霜凝露也、音蒼和名毛

蠶 說文云、蠶早霜也、丁念反、和名毛豆

〔箋注倭名類聚抄風雨〕按、玉篇霜露凝也、陸氏蓋本此、說文霜喪也、成物者、釋名霜喪也、其氣慘毒、物皆喪也、

〔段注說文解字雨十一下〕霜喪也、以疊韻、成物者、幽風九月霜、傳曰、霜縮也、霜降而收、縮萬物、秦風白

所以生物、雪亦所以生物、而非殺物者、故其用在霜、殺物之後、詩言雨、雪、霧、霰、之、以、雪、益、之、以、霰、生、我、百、穀、其、證、也、惟、霜、爲、難、斂、萬、物、之、用、許、列、字、首、爲、動、萬、物、者、莫、病、乎、此、也、次、之、以、雪、乃、次、之、以、霰、零、謂、冬、

凝、霜、而、後、春、雨、也、次、之、以、霜、而、歲、功、成、矣、歲、功、以、雪、始、以、霜、終、乃、从、雨、相、聲、所、莊、切、

〔類聚名義抄雨七〕霜 音蒼 シモ 霜ハツシモ

〔日本釋名天象〕霜 下にあるの義也、霜滿天などいへ共、かたちのみゆるは下にあり、又高山に霜

なし、一説は白也、もはさむき也、むともと通ず、白してさむきなり

〔東雅天文〕霜 シモ 義不詳、東北の地方にて、冬の空のきはめてさえぬる夜に、降れる霜の、木末垣

ほなどに、悉皆花をなしぬるを、シラボといふものは、即是霜華なり、シラボとはシモといふ語の

轉じたるなり、其語方言には出たれど、シモといひしは、其色の白きに因れりといふ事の、徴とす

るには足りぬべきなり、或説に、シモとはシムなり、寒き事の身にシム

〔倭訓栞前編十一〕玄も 霜は玄ぼむ義、草木霜にあふて、凋零するをもて名くる成べし、又玄むの

義、肅殺の氣をもていへり、